

調査研究

都市における給料生活者の出産力

岡崎文規
佐藤寧子

一、緒言

私は、さきに、一九四〇年に本研究所で実施した「出産力調査」の結果を再集計して、農耕者の出産力に関する統計的観察と題する小論文を発表した。そして都市における給料生活者の出産力については、別の機会にこれを観察することを約束しておいた。本稿は、その約束にしたがつて、書かれたものである。

出産力調査で調査された都市における給料生活者というのは、主として官庁の公務員、銀行員、小学校教員、市電従業員、高級社員（当時の高額所得税納税者）などであるから、だいたいにおいて、東京市における給料生活者の出産力調査であるといつてよい。

これら給料生活者の調査票総数は二七、七四八票であるが、このうちで妻の年齢が妊孕期間を経過している夫婦（調査当時、妻の年齢が四十四歳以上の者）は三、〇五五票である。このなかから、初婚再婚の区別を記入してない調査票、夫婦の結婚年月を記入してない調査票は利用しえないために、これを除外した。このようにして除外された調査票は一四七票であつて、結局、この研究に使用した

調査票は二、九〇八票である。

二、九〇八票の調査票のうち、夫婦の双方が初婚の者は二、三八四、夫婦の一方または双方が再婚の者は五二四である。双方初婚の夫婦二、三八四のうち、有子の夫婦は二、一七三、無子の夫婦は一一である。一方または、双方が再婚の夫婦五二四のうち、有子の夫婦は三一七、無子の夫婦は二〇七である。

これらの調査票には、夫婦の初婚再婚の別のほかに、夫婦の出生年月、夫婦の結婚年月、子女の有無、出生児数を記載してあつて、一応、研究に役立つものである。しかし、出生順位別出生間隔を計算するには、それぞれの出生児について、出生年月が正確に記入されていなければならない。ところが、これらの調査票のうちには、出生児の出生年月を記入しないで、単に何歳と記入してあるものが少くなかつた。双方初婚の夫婦については、出生順位別出生間隔を計算する必要上、出生児の出生年月の記入が不正確である調査票を除外した。除外された調査票は一三四票であるから、結局双方初婚の夫婦の調査票のうちで、出生順位別出生間隔の計算に利用された調査票は二、〇三九票である。

以下、前の論稿において試みたと略ぼ同一の仕方で「都市給料生活者の出産力」について、統計的観察を行うことにしよう。かくすることによつて、農業者のもつ最も大きな出産力と大都市における給料生活者のもつ最も小さい出産力とを容易に比較することができ

二 有子の夫婦と無子の夫婦

妻の全妊孕可能期間を通じて、一子も持たない夫婦は、別の論稿で示したように、農耕者においては一二・三三%であつたが、都市の給料生活者においては一四・三七%であつて、多少、多くなつてゐる。しかし、これは初婚の夫婦と再婚の夫婦とをひとまとめにした場合の結果であつて、無子の夫婦の割合を初婚の夫婦と再婚の夫婦に分けて観察すると、第一表のようであつて、それぞれのあいだに相当に大きな差異のあることがわかる。

双方初婚の夫婦は、下の第一表で明らかのように、全夫婦の大部分を占めてゐるのであつて、その無子の夫婦の割合は僅か八・八五%にすぎない。それにかかわらず、全夫婦における無子の夫婦の割合が一四・三七%にも達してゐるのは、再婚の夫婦における無子の夫婦の割合が高く、その影響によるものである。しかし、再婚の夫婦においても、妻が再婚であるか、夫が再婚であるか、また夫婦の双方が再婚であるかによつて、無子の夫婦の割合は著しく異なつてゐる。

下の第一表で見ると、無子の夫婦の割合は、妻初婚・夫再婚の夫婦において一五・九八%、夫初婚・妻再婚の夫婦において四五・五六%、双方再婚の夫婦において五六・二五%にも達してゐる。妻が再婚の場合には、無子の夫婦の割合が著しく高いことがわかる。双方初婚の夫婦に較べて、夫婦の一方または双方が再婚の夫婦にお

第1表 有子の夫婦と無子の夫婦の割合

	実 数			比 率		
	総 数	有子の夫婦	無子の夫婦	総 計	有子の夫婦	無子の夫婦
初婚の夫婦	2,384	2,173	211	100.00	91.15	8.85
妻初婚・夫再婚の夫婦	194	163	31	100.00	84.02	15.98
夫初婚・妻再婚の夫婦	90	49	41	100.00	54.44	45.56
双方再婚の夫婦	240	105	135	100.00	43.75	56.25
計	2,908	2,490	418	100.00	85.63	14.37

ては、妻の生理的受胎機能に多くの障害があるとか、また出産を全く回避しようという傾向が大きいとかいうこともあるかも知れないが、これを統計的に実証することは困難であつて、妻の結婚年齢が高く、往々にして妊孕閉止期に近い年齢で結婚する者も少くないために、その無子の割合を高めてゐるのであると考えることができる。そしてこのことは統計的に実証することができる。

初婚の夫婦と再婚の夫婦について、妻の結婚年齢を示すと、次頁の第二表のようである。

この第二表で見ると、三五才を越えて結婚してゐる妻（きわめて晩婚）の割合は、双方初婚

の夫婦においては僅か一%にすぎないが、妻初婚・夫再婚の夫婦においては七・二%、夫初婚・妻再婚の夫婦においては二二・二%、双方再婚の夫婦においては三八・九%にも達してゐる。妻の結婚年齢が高くなると、妊孕可能期間がそれだけ短縮されるのであるから、出生見数の少くなることは、理論上、当然のことであるが、それだけではなく、子供を全く産まない機会も増大するのである。このことは、妻の結婚年齢別に無子の夫婦の割合を観察することによつて実証することができる。いま妻の結婚年齢別に有子の夫婦と無子の夫婦との割合を示すと、つぎの第三表のようである。

第 2 表 夫婦の初婚・再婚別に見た妻の結婚年齢

妻の結婚年齢	双方初婚の夫婦		妻初婚・夫再婚の夫婦		夫初婚・妻再婚の夫婦		双方再婚の夫婦	
	実数	比率 %	実数	比率 %	実数	比率 %	実数	比率 %
20歳未満	627	26.3	24	12.4	4	4.4	2	0.8
20—24歳	1,173	49.2	66	34.0	14	15.6	19	7.9
25—29歳	471	19.8	57	29.4	25	27.8	63	26.2
30—34歳	89	3.7	33	17.0	27	30.0	63	26.2
35—39歳	16	0.7	11	5.7	12	13.3	48	20.2
40歳以上	8	0.3	3	1.5	8	8.9	45	18.7
合計	2,284	100.0	194	100.0	90	100.0	240	100.0

下の第三表で見ると、妻の結婚年齢が若い場合にも、無子の夫婦が存在するが、その割合はきわめて少い。たとえば妻の結婚年齢二〇歳未満の場合には、無子の夫婦の割合は五・二%、妻の結婚年齢二〇—二四歳の場合には、無子の夫婦の割合は七・四%にすぎないが、妻の結婚年齢がそれ以上に大きくなると、無子の夫婦の割合は次第に増加して、妻の結婚年齢四〇歳以上の場合には、無子の夫婦の割合は実に八四・四%にも達している。

第 3 表 妻の結婚年齢別に見た有子の夫婦と無子の夫婦の割合

妻の結婚年齢	実数			比率		
	総数	有子の夫婦	無子の夫婦	総数	有子の夫婦	無子の夫婦
20歳未満	657	623	34	100.0	94.8	5.2
20—24歳	1,272	1,178	94	100.0	92.6	7.4
25—29歳	616	496	120	100.0	80.5	19.5
30—34歳	212	139	73	100.0	65.6	34.4
35—39歳	87	44	43	100.0	50.6	49.4
40歳以上	64	10	54	100.0	15.6	84.4
合計	2,908	2,490	418	100.0	85.6	14.4

三 一 夫婦当り出生児数

夫婦の総数は、すでに述べたように、二、九〇八であつて、その出生児総数は一二、三三七であるから、一夫婦当り出生児数は四・二四である。農耕者の一夫婦当り出生児数は五・〇九であるから、都市における給料生活者の一夫婦当り出生児数は〇・八五だけ少いことになる。それゆえに、都市における給料生活者の出産力は、農耕者の出産力よりも弱く、全妊孕可能期間を通じて、出生児数は平均的に約一見だけ少いことがわかる。

つぎに出生力は、妻の結婚年齢によつてどれだけの影響を受けるものであるかを観察しよう。いま、妻の結婚年齢別に一夫婦当り出生見数を示すと、つぎの第四表のようである。

第4表 妻の結婚年齢別に見た一夫婦当り出生見数

妻の結婚年齢	夫婦数	出生見数	一夫婦当り出生見数
20歳未満	657	3,607	5.5
20歳	294	1,544	5.3
21	275	1,338	4.9
22	275	1,339	4.9
23	240	1,120	4.7
24	188	769	4.1
25	175	723	4.1
26	164	562	3.4
27	114	337	3.0
28	84	227	2.7
29	79	216	2.7
30—34歳	212	438	2.1
35—39歳	87	93	1.1
40歳以上	64	24	0.4
合計	2,908	12,337	4.2

右の第四表によつて、妻の結婚年齢が高まるにつれて、一夫婦当り出生見数は明らかに減少することが判るのであつて、一夫婦当り出生見数は、妻の結婚年齢が二〇歳前後の場合には五子、妻の結婚年齢が二四歳または二五歳では四子、妻の結婚年齢が二八歳または二九歳までは三子、妻の結婚年齢が三〇歳を越えると、一夫婦当り出生見数は目立って減少し、特に妻の結婚年齢が四〇歳以上の場合には、一夫婦当り出生見数は僅か〇・四にすぎない。

一夫婦当り出生見数は、初婚の夫婦と再婚の夫婦とでは差異があるのであつて、つぎの第五表は、この事実を示している。

下の第五表を見ると、一夫婦当り出生見数は、双方初婚の夫婦において最も多く四・六八である。妻が初婚でも夫が再婚の夫婦においては三・四七であつて、双方初婚の夫婦に較べて一・二二も少い。妻が再婚の夫婦では、一夫婦当り出生見数はきわめて少く、二以下にすぎない。都市における、給料生活者の一夫婦当り出生見数が四・

第5表 初婚・再婚別に見た一夫婦当り出生見数

	夫婦数	出生見数	一夫婦当り出生見数
双方初婚の夫婦	2,384	11,159	4.68
初婚の夫婦・再婚の夫婦	194	673	3.47
再婚の夫婦・再婚の夫婦	90	174	1.93
双方再婚の夫婦	240	331	1.38

二四に達しているのは、双方初婚の夫婦における一夫婦当り出生見数が四・六八であり、そして双方初婚の夫婦は、全夫婦の大部分を占めているからにほかならない。

四 双方初婚の夫婦における妻の結婚年齢別一夫婦当り出生見数

双方初婚の夫婦は、最も常態的な夫婦であるとともに、全夫婦数に対する割合も圧倒的に多い。すなわち全夫婦数二、九〇八のうちで、双方初婚の夫婦は二、三三四であつて、約八二％に達している。そこで、以下、主として双方初婚の夫婦の出生力について、いろいろの角度から観察を試みることにする。

まず双方初婚の夫婦における妻の結婚年齢別一夫婦当り出生見数を示すと、つぎの第六表のようである。

次頁の第六表を見ると、双方初婚の夫婦における妻の結婚年齢別一夫婦当り出生見数は、全夫婦の場合に較べて全く同様に、妻の結婚年齢が高くなるに従つて、次第に減少している。すなわち一夫婦当り出生見数は、妻の結婚年齢が一九歳未満の場合には五・六であつて最も多く、妻の結婚年齢が高くなるに従つて減少しているが、妻の結婚年齢が二三歳までは略ぼ五人に近い出生見をもっている。妻の結婚年齢が二六歳を越えると、一夫婦当り出生見数は四人以下になり、また妻の結婚年齢が三十歳を越えると、一夫婦当り出生見数は著減して二人以下になる。

妻の結婚年齢が高くなることは、妊孕可能期間をそれだけ短縮す

第6表 双方初婚の夫婦における妻の出生児数別

妻の結婚年齢	夫婦数	出生児数	一夫婦当り出生児数
20歳未満	627	3,483	5.6
20歳	274	1,468	5.4
21	259	1,275	4.9
22	255	1,232	4.8
23	218	1,031	4.7
24	167	704	4.2
25	151	657	4.3
26	136	461	3.4
27	82	271	3.3
28	49	141	2.9
29	53	162	3.1
30 — 34	89	242	2.7
35 — 39	16	18	1.1
40歳以上	8	14	1.7
合計	2,384	11,159	4.7

ることであるから、受胎能力や出産意欲が不変であるとしても、出産機会は少くなる道理である。二〇歳で結婚した妻は平均五・四人の出生児をもっているが、二五歳で結婚した妻の平均出生児は一・一子少く、また二九歳で結婚した妻の平均出生児は二・三子少く、四〇歳以上で結婚した妻の平均出生児は三・七子も少くなっている。双方初婚の夫婦における妻の結婚年齢別一夫婦当り出生児数はいずれの妻の結婚年齢においても、農耕者に較べて、都市の給料生活者の方が少い。

五 双方初婚の夫婦における出生児数別夫婦の分布

双方初婚の夫婦における一夫婦当り出生児数は、すでに述べたように、四・七人であるがそれぞれの夫婦の出生児数はまちまちであつて、出生児数別に夫婦の分布を示すと、つぎの第七表のようである。

下の第七表を見ると、双方初婚の夫婦は、全く子女をもたない者

第7表 双方初婚の夫婦における出生児数の分布

出生児数	夫婦数	百分比
0	211	8.9%
1	188	7.9%
2	198	8.3%
3	251	10.5%
4	265	11.1%
5	315	13.2%
6	274	12.3%
7	253	10.6%
8	191	8.0%
9	112	4.7%
10	71	3.0%
11	22	0.9%
12	8	0.3%
13	2	0.1%
14	3	0.1%
合計	2,384	100.0%

から最高一四子をもつ者のあいだに分布している。無子の夫婦の割合が八・九%であることは、すでに述べたが、一子または二子をもつ夫婦の割合は、これよりも少く、それぞれ七・九%、八・三%である。都市の給料生活者では、三子ないし六子をもつ夫婦の割合は相当に大きく、全夫婦の五七・七%を占め、そしてモードは五子をもつ夫婦の一三・二%のところにある。

都市における給料生活者のなかにも、一〇子以上をもつ多産の夫婦もないではないが、その割合はきわめて少く、全夫婦の四・四%にすぎない。

農耕者の夫婦においても、その出生児数別分布は、無子の夫婦から一四子をもつ夫婦に分散しているが、無子の夫婦を含めて、三子以下をもつ夫婦の割合は少く、五子以上をもつ夫婦の割合は多く、そのモードは七子をもつ夫婦の一四・三%のところにあつた。すなわち農耕者は、都市の給料生活者に較べて、多産の夫婦が遙かに多いのである。

つぎに、双方初婚の夫婦における出生児数別夫婦の分布を妻の結婚年齢別に示すと、つぎの第八表のようである。

右の第八表を見て、まず第一に気付くことは、妻の結婚年齢の大小にかかわらず、四子をもつ夫婦の割合は略ぼひとしく、一〇%ないし一二%のあいだにあることである。ところが妻の結婚年齢が

第 8 表 双方初婚の夫婦における妻の結婚年齢別に見た出生児数別夫婦の分布 (a)

妻の結婚年齢	出生児数											合計
	0子	1子	2子	3子	4子	5子	6子	7子	8子	9子	10子以上	
20歳未満	31	32	47	46	64	85	71	77	75	44	55	627
20 — 24	80	83	89	129	131	159	161	139	93	59	50	1,173
25 — 29	74	53	42	62	57	62	54	37	23	6	1	471
30歳以上	26	20	20	14	13	9	8	0	0	3	0	113
合計	211	188	198	251	265	315	294	253	191	112	106	2,384

(b) 比 率

妻の結婚年齢	出生児数											合計
	0子	1子	2子	3子	4子	5子	6子	7子	8子	9子	10子以上	
20歳未満	4.9	5.1	7.5	7.4	10.2	13.6	11.3	12.3	11.9	7.0	8.7	100.0
20 — 24	6.8	7.1	7.6	11.0	11.2	13.6	13.7	11.9	7.9	5.0	4.2	100.0
25 — 29	15.7	11.2	8.9	13.2	12.1	13.2	11.5	7.9	4.8	1.3	0.2	100.0
30歳以上	23.0	17.7	17.7	12.4	11.5	8.0	7.1	0	0	2.6	0	100.0
合計	8.9	7.9	8.3	10.5	11.1	13.2	12.3	10.6	8.0	4.7	4.5	100.0

若い夫婦においては、無子ないし三子をもつ夫婦の割合はきわめて

小さく、五子ないし八子をもつ夫婦の割合は相当に多いのに対して、妻の結婚年齢が高い夫婦においては、無子ないし三子をもつ夫婦の割合が相当に多く、五子以上をもつ夫婦の割合はきわめて小さい。たとえば無子の夫婦の割合は、妻の結婚年齢二十歳未満の夫婦では僅か四・九%にすぎないが、妻の結婚年齢三〇歳以上の夫婦においては実に二三・〇%にも達している。また一子ないし三子をもつ夫婦の割合は、妻の結婚年齢二〇歳未満の夫婦では、二〇%にすぎないが、妻の結婚年齢三〇歳以上の夫婦においては四七・八%にも達している。これに反して、七子以上をもつ夫婦の割合は、妻の結婚年齢二〇歳未満の夫婦では三九・九%もあるが妻の結婚年齢三〇歳以上の夫婦では僅か二・六%にすぎない。

六 双方初婚の夫婦における出生児数別に見た出生順位別平均出生間隔

双方初婚の夫婦はすでに述べたように、二、三、四であり、このうち有子の夫婦は二、一七三である。出生順位別に平均出生間隔を計算するには、出生児の生年月の記入が不正確な調査票を除外しなければならぬのであつて、このために除外した調査票は一三四であるから、ここで利用した調査票は二、〇三九である。出生児数別に見た出生順位別平均出生間隔を算術平均で計算した結果を示すと、次頁の第九表のようである。

さきに、農耕者の出産力に関する統計的観察を発表したさいに、Dr. Whelpton から「アメリカにおける一般婦人の出産速度から判断して、日本婦人の出産間隔は長すぎるようにおもわれる。」という批判を受けた。私も、日本の夫婦における出生児の出生間隔が、予期したよりも長いことを不思議に思っている。たとえば、第九表を見ても、一児をもつ母が結婚から第一子出生までの平均出生

第9表 双方初婚の夫婦における出生児数別に見た出生順位別平均出生間隔
(算術平均による計算)

	1子をもつ母	2子をもつ母	3子をもつ母	4子をもつ母	5子をもつ母	6子をもつ母	7子をもつ母	8子をもつ母	9子をもつ母	10子をもつ母	11子をもつ母	12子をもつ母	13子をもつ母	14子をもつ母
結婚から第1子出生までの平均間隔	68.86	41.96	29.11	25.91	22.56	21.11	20.86	19.44	16.52	21.16	20.44	13.29	14.50	27.50
第1子出生から第2子出生までの平均間隔		58.01	40.69	40.50	34.02	31.05	28.82	30.85	27.10	23.55	24.19	23.43	24.50	13.50
第2子—第3子			53.90	43.88	35.24	34.47	31.14	29.70	27.75	27.23	24.81	24.29	21.00	22.50
第3子—第4子				50.74	38.47	34.98	31.29	29.64	28.08	27.94	25.13	20.57	30.50	14.00
第4子—第5子					42.25	36.28	30.70	30.26	27.50	27.08	25.44	23.57	25.00	17.50
第5子—第6子						43.16	34.56	31.52	28.10	27.32	27.37	23.14	20.50	21.00
第6子—第7子							39.59	33.00	29.28	26.53	27.37	23.86	22.00	24.00
第7子—第8子								36.80	31.50	27.69	27.69	22.00	20.50	20.50
第8子—第9子									36.17	27.60	28.56	29.00	20.00	13.00
第9子—第10子										35.27	30.13	22.29	11.50	22.00
第10子—第11子											31.50	25.86	22.50	11.50
第11子—第12子												31.29	31.50	26.50
第12子—第13子													31.50	44.00
第13子—第14子														19.50

間隔が六八・八六月もの長さをもっているが、それは信じられないほどに長い出生間隔である。そこで、出生児数別に、結婚から第一子出生までの出生間隔別に母の分布状況を観察して見た。その結果は第一〇表のようである。

次頁の第一〇表で、まず一子をもつ母の出生間隔別分布を見ると、一三月未滿から実に二七七—二八八月の広い幅に分布していることがわかる。母の九・七三%は結婚から一三月未滿で、また母の二二・七%は結婚から一三—二四月で出産しているが、結婚から六〇月以上を経過して出産している母は全体の約半数を占めているのである。平均出生間隔を算術平均で計算する場合には、結婚から第一子出生までの出生間隔一三〇月の母は、結婚から第一子出生までの出生間隔一三三月の母一〇人に匹敵するのである。このように結婚から第一子出生までの出生間隔が著しく長い母が相当の数に達しているのであるから、平均出生間隔を算術平均で計算すると、出生間隔がこのように長くなるのである。この一子をもつ母が結婚から第一子出生までの平均出生間隔を算術平均で計算すると、六八・八六月になるが、中央値で求めると、四六月になる。しかし、それにしても、この出生間隔は長いといわなければならぬ。二子をもつ母の出生間隔別分布も、一子をもつ母の場合ときわめて近い傾向を示している。

一子または二子しかもちえないような母は、多くの場合、彼女の繁殖率から見て、異常であるのではあるまいか。したがって彼女たちの平均出生間隔は、計算方法の如何を問うことなく、きわめて異常的のものであるといふべきであろう。第一〇表で見られる通り、多産の母ほど、結婚から第一子出生までの出生間隔の幅が短くなっている。たとえば、五子をもつ母においては、結婚から第一子出生までの出生間隔は一三月未滿から一三三—一四四月のあいだに、また九子をもつ母においては、結婚から第一子出生までの出生間隔

第 10 表 結婚から第 1 子出生までの間隔による母の分布

	1 子をもつ母		2 子をもつ母		3 子をもつ母		4 子をもつ母	
	実 数	比 率	実 数	比 率	実 数	比 率	実 数	比 率
13ヵ月 未 満	18	9.73	26	13.69	52	21.76	51	20.00
13 -- 24月	42	22.70	69	36.33	99	41.41	115	45.10
25 -- 36	21	11.35	22	11.59	38	15.89	42	16.47
37 -- 48	13	7.03	17	8.95	15	6.28	18	7.06
49 -- 60	12	6.49	8	4.21	15	6.28	14	5.49
61 -- 72	12	6.49	13	6.84	2	0.84	4	1.57
73 -- 84	10	5.42	7	3.64	4	1.67	4	1.57
85 -- 96	6	3.24	8	4.21	2	0.84	4	1.57
97 -- 108	11	5.95	8	4.21	4	1.67	1	0.39
109 -- 120	5	2.70	3	1.58	3	1.26	1	0.39
121 -- 132	6	3.24	4	2.11	3	1.26	0	0.00
133 -- 144	2	1.08	1	0.53	1	0.42	1	0.39
145 -- 156	7	3.78	2	1.05	0	0.00	0	0.00
157 -- 168	5	2.70	0	0.00	1	0.42	0	0.00
169 -- 180	3	1.62	0	0.00	0	0.00	0	0.00
181 -- 192	1	0.54	0	0.00	0	0.00	0	0.00
193 -- 204	2	1.08	1	0.53	0	0.00	0	0.00
205 -- 216	3	1.62	0	0.00	0	0.00	0	0.00
217 -- 228	2	1.08	0	0.00	0	0.00	0	0.00
229 -- 240	1	0.54	1	0.53	0	0.00	0	0.00
241 -- 252	1	0.54	0	0.00	0	0.00	0	0.00
253 -- 264	1	0.54	0	0.00	0	0.00	0	0.00
265 -- 276	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
277 -- 288	1	0.05	0	0.00	0	0.00	0	0.00
合 計	185	100.00	190	100.00	239	100.00	255	100.00

四子をもつ母の平均出生間隔は、出生児の出生順位が高まるにつれて、ほとんど段階的に長くなっている。六子をもつ母の平均出生間隔も、四子をもつ母の平均出生間隔と近似しているが、第三子、第四子の出生間隔はさほど距つていない。八子または一〇子をもつ多産の母においては、出生児の出生順位が高まると、出生間隔は長くなっているものの、その中間の順位にある出生児の出生間隔は略ぼ均しい。これは注目すべき一つの特徴であるといつてよい。

第二に注目すべき点は、如何に多産の母であつても、末子の出生間隔は相当に長くなつてゐることである。たとえば八子をもつ母においては、第七子の出生間隔は三三・〇〇月であるが、第八子の出生間隔は三六・八〇月であり、九子をもつ母においては、第八子の出生間隔は三一・五〇月であるが、第九子の出生間隔は三六・一七月であり、また一〇子をもつ母においては、第九子の出生間隔は二七・六〇月であるが、第一〇子の出生間隔は三五・二七月である。